
僕の恋人

蒲公英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の恋人

【Nコード】

N1321S

【作者名】

蒲公英

【あらすじ】

加藤ほろさんの「歳の差恋愛企画。」に乗っからせていただきました。どっこいしょっと。

僕の恋人は、こんな人・・・ってご紹介。

夜の12時に携帯が震える。

「ハーフムーンにいるから、おいでえ」

ハーフムーンっていうのは彼女の行きつけのBarの名前で、多分カウンターに座ってバーボンなんか飲んでる筈。

「補導されちゃうよ」

「なあに気弱なこと言ってるの。夜遊びしないとイイオトコにならないぞお」

「明日、試験があるんだけど」

「付け焼刃の勉強なんて、意味ない。とにかく来なさい」
こうなると、彼女は「行く」と言うまで電話を切らない。

溜息をついてジーンズを穿き、MA-1を羽織る。

僕の自転車は二人乗りできないので、母の自転車を借りる。

「伊織、どこに行くの？」

「ちょっとコンビニ」

「あんたのコンビニは片道1時間だもんねえ」

はいはいすみません、とかなんとか言いながら、玄関を出る。

僕だって、好き好んで夜中に出るわけじゃないんだよ、まったく。

「あ、来た来た。まーちゃん、伊織君が迎えに来たよ」

ハーフムーンの中には、マスターと真昼さんだけ。

もう、閉店時間過ぎてるもんなあ。

「伊織、おっそーい。遅いから、ちょっと飲みすぎちゃったじゃない」
「い」

「僕が来なくても、酔っ払ってるくせに」

スツールから降りるのに肩を貸すと、焦げた樽の匂いがした。

男の子みたいに短い髪で、身体にピッタリしたシャツとカーゴパンツ。

職業は、建築士。

化粧つ気のない顔で細い肩の彼女は、酔っ払った顔で僕を見て機嫌良く笑う。

「手のかかる人だなあ」

「伊織に手をかけさせたいの」

「我儘なんだから」

自転車の後ろに彼女を乗せて、夜の街を走る。

「深夜徘徊と道交法違反なんだからね、もう」

「意気地なし。男が小さいこと言わないの」

どっちが子供だか、わかりゃしない。

部屋まで送って、冷蔵庫からミネラルウォーターを出すのは僕の役目。

お礼はいつもキスひとつ。

「伊織も早く大人になればいいのに。いろいろと楽しいよお」

自分は僕の首に腕をまわすクセに、僕が腰に腕をまわそうとすると、するりと逃げる。

「子供にはまだ早い」

真昼さんを押し倒しちゃう力くらいはあるんだけどな。

パジャマに着替えもしないでベッドに入っちゃう真昼さんが、寝惚けた声で言う。

「伊織がそこにいてくれると、安心して眠れるの」

真昼さんの静かな寝息を聞きながら、額にキスして灯りを消して、玄関のドアを開ける。

鍵をしつかり閉めて、マンションの通路を自転車に向かって歩き出す。

ちえっ！酔っ払い！今度酔いつぶれたら襲っちゃうぞ。

夜の静かな街に自転車を走らせながら、真昼さんの寝顔を思い出し
たりしてる僕って、お人好し。

27歳の真昼さんと17歳の僕は、いつか大人同士になる。
待ってて、屈託のない真昼さんのままで。

自転車を立ち漕ぎしながら、家に向かってただ走る。

・・・いけね。明日の試験、実力勝負か？

(後書き)

何か一言声をかけていただけると、幸いです。
軽すぎ！なんてお叱りはご尤も。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1321s/>

僕の恋人

2011年4月16日12時53分発行